

郷土博物館・文学館だより



「流行」(子供の流行として昭和40・50年代の玩具などを展示)



「家電」(進駐軍払い下げの革ジャンや家電製品、『暮らしの手帖』などを展示)



「ゴジラ」
大型模型

企画展

「なつかしき昭和の暮らし」開催中!

平成27年に戦後70年を迎え、時代の一つの大きな節目を迎えたことから、今年は戦後の昭和を振り返る展示を企画しました。本展では、「家電」・「住宅」・「流行」という3つの切り口から昭和を紹介しています。

「家電」では、戦後すぐに軍から放出された航空機用のジュラルミンで造られた電熱機を始め、洗濯機・テレビ・冷蔵庫などの資料。「住宅」では、進駐軍による統制の中で建てられた12坪の住宅の図面や写真、戦後日本で初めての鉄筋分譲集合住宅である「宮益坂アパート」の取り外し部材などの資料。「流行」では、ファッションとして、カミナリ族の革ジャンやベルボトムのジーンズ、パンタロン、婦人服のアップパなどの資料。子供の流行として、進駐軍シブのブリキのおもちゃ、ゴジラの大模型、仮面ライダーのソフビ、ポケットメイト(ゲーム)、およげたいやきくんのレコードなど、郷愁を誘う資料が展示されています。



2月11日に行われた展示解説

渋谷の長者伝説

長者伝説は全国各地に分布していますが、渋谷近辺でもいくつかみることが出来ます。元禄7年（1694）に刊行された『増補江戸咄』からその一つを紹介してみましょう。

むかし渋谷長者という者がおり、「金（こがね）の長者」ともいわれ、代々、幼名を金王丸と称していた。一方、目黒の白金村にも「銀（しろがね）の長者」という者がいて、銀王丸と称していた。銀王丸が目黒不動に参詣した際、そこに来ていた渋谷長者の娘を見そめ、二人はすぐに恋仲となった。ある夜、二人がとある川の橋を渡ろうとしたところ、橋の下から鬼が現れ、二人が渡るのを妨げようとした。すると、銀王丸が目黒不動の前で拾った筍（こうがい）が、俱利伽羅（くりから）不動の姿となって現れ、鬼を追いはらった。鬼は、姫に恋い焦がれ亡くなった者の魂だった。その後、渋谷長者は銀王丸を婿にとり、銀の長者は弟が継いだということである。

この話では橋の名前は登場しませんが、享保17年（1732）に刊行された『江戸砂子』には、「鉤匙橋（筍橋）」という項目の中で、源経基と筍にまつわる伝説とともに、一つの説としてこの話に触れています。伝説の舞台である筍橋は、大正時代まで現在の港区西麻布四丁目に現存していましたが、川の暗渠化とともに姿を消しました。

この橋の北方、現在の港区南青山三・四丁目付近は、かつて長者丸と呼ばれていました。『江戸砂子』には、「長者が丸」の項目で「むかし此

所に渋谷長者と云者住けり」と述べ、やはり「金王丸」および「白金の長者」について紹介しています。天保年間刊行の『江戸名所図会』によれば、かつてはこの長者丸付近には「渋谷長者の墳墓」といわれる小高い塚もあったようです。

これらは、特殊な地名や金王丸伝説などの要素をもとに作られたものと思われませんが、その中に何らかの事実を反映した部分があるのかもしれない。最後にもう一つ、「朝霧が滝」の伝説を『江戸砂子』から紹介します。

むかし渋谷宗順という長者の娘に撫子（なでしこ）姫という者がいた。あるとき姫は円証寺の桜を見に両親と出かけたが、その寺に仕える朝霧という少年が姫を一目見て恋に落ちた。しかし、かなわぬ恋ゆえにこの滝に身を投げたということである。

この滝や円証寺の所在は、今ではまったくわかりません。また、ここにでてくる「渋谷宗順」という名前

はこの伝説以外にみることはできません。創作だとしても、具体的なこの名前が何によるのか、滝や寺はどこにあったのか、興味は尽きません。



筍橋（『江戸名所図会』）

与謝野寛の最期

昭和10年(1935)3月26日、与謝野寛は肺炎のため、信濃町の慶應義塾大学病院で亡くなりました。

明治6年(1873)、京都市外岡崎村の浄土真宗西本願寺派の支院・願成寺に生まれた寛は、七歳頃父親の事業が失敗して寺が転売されたため、一家で鹿児島へ移ります。そこから寛の流浪の日々が始まり、大阪の安養寺、岡山の安住院、山口県徳山市の徳應寺などを転々とします。その間に漢詩や万葉集、和歌に親しみ、明治23年から鉄幹の号を使い始めます。

明治25年には上京して歌人で国文学者の落合直文の門下に入り、近代短歌結社の草分けである浅香社を創設、やがて明治27年『二六新報』に歌論「亡国の音」を発表し、旧派歌人の軟弱な歌風を痛撃して革新の口火を切ります。翌年から30年までの間には何度か渡韓し、詩歌集『東西南北』『転地玄黄』などを発表、「妻をめとらば才たけてみめ麗しく情けあり……」あまりにも有名な「人を恋ふる歌」はこの頃に作られたものです。こうした初期の作品は「虎剣流」と言われる勇壮なものでした。そして明治32年には渋谷で東京新詩社を設立し、翌年には機関誌『明星』を創刊します。

しかし明治34年、鉄幹と浅田信子、林滝野、山川登美子、鳳晶子(後の与謝野晶子)ら複数の女性との恋愛を中傷する怪文書『文壇照魔鏡』が刊行され、鉄幹は窮地に立たされます。

これを救ったのは、鉄幹との恋の経緯や心情

を浪漫的に詠いあげた晶子の『みだれ髪』でした。これに呼応して鉄幹が発表した『紫』には、「われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだえの子」をはじめ、情熱的な歌が数多く掲載されています。これらの詩歌集が多くて若者に支持されることによって、鉄幹はスキャンダルから脱し、文壇での地位も回復することができました。

しかし、アララギ派の台頭とともに、高村光太郎、石川啄木、吉井勇、木下杢太郎、北原白秋らを生み出した『明星』も次第に衰退し、明治41年に100号をもって廃刊となります。

明治38年に鉄幹の号を廃した寛は、かつての勢いを取り戻すことなく、昭和7年(1932)に「爆弾三勇士」が毎日新聞の公募で一等入選したことが、最後の輝かしい業績となりました。

夫のプロデュース無くして、自らの栄光は為し得なかったことを自覚していた晶子は、寛を物心両面で支え続けまし

た。晶子は寛の最期について「枕辺に行くと「今までどこにいたの?」と初恋をする少年のように自分を見たのが忘れられない」と

『冬柏』に書いています。歌人・晶子の最大の才能は寛への恋心を生涯持ち続けられたことにあったのかも



与謝野鉄幹 『紫』
東京新詩社 明治34年
(複製)

収蔵資料紹介



土偶の脚部

高さ 3.5 cm
足底長軸 5.0 cm
足底短軸 3.5 cm

渋谷区の最南端部、都立広尾病院の南側に広がる遺跡が、豊沢貝塚です。この貝塚は、縄文時代の後・晩期を中心としています。この付近は縄文時代より前の旧石器時代から人が住み始めていました。

この豊沢貝塚が発見されたのは、今から約百年前の大正年間です。地元の方が屋敷内に池を作ろうと穴を掘ると、土器や石斧・石鏃などが出土しました。その後、昭和五年（一九一〇）、「J」恵比寿・豊沢に所在する教会で建物を建替えることとなり、初めて本格的な調査が行われました。

側や足の甲の部分は、丁寧にハラ状の工具で磨きかけられています。時期は後期と想定されています。

さて、この土偶ですが縄文時代の初め・草創期から終わりの晩期まで出土します。有名なものは、遮光器土偶、ハート形土偶、ミニスク形土偶などがあります。土偶の多くには乳房や妊婦が表現されており、女性ないし、母性の象徴とする説が多いようです。また遺跡が発見される土偶は、豊沢貝塚で出土したものと同じように、頭や手足、胸部がバラバラになって見つかります。そのため呪術的なものに使ったという考えもあります。しかしながら欠けることなく、完形で出土する例も増えてきているのが現状です。時期や地域によって、いろいろな違いを見せる土偶は、まだまだ謎の多い遺物です。

【今後の展示予定】

◆企画展「なつかしき昭和の暮らし」
平成 29 年 1 月 31 日（火）～3 月 26 日（日）

◆応募展「第 17 回渋谷現代短歌入選作品展示」
平成 29 年 4 月 1 日（土）～4 月 9 日（日）
* 第 17 回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

◆企画展「写真展 明治・大正時代の渋谷」
平成 29 年 4 月 15 日（土）～6 月 4 日（日）

◆企画展「新収蔵資料展」
平成 29 年 6 月 10 日（土）～8 月 6 日（日）（予定）

◆企画展「記憶の中の街 渋谷」
平成 29 年 8 月 12 日（土）～10 月 15 日（日）（予定）

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は 16:30 まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 舞臺のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.34
平成 29 年 3 月 1 日発行